小倉正恒（まさつね）と簡斎（かんさい）文庫

木　島　史　雄

サ マ リ ー：愛知大学豊橋図書館が所蔵する「簡斎文庫」について、二つの側面からその価値を考察する。一つはコレクション形成者・旧蔵者でもある小倉簡斎の経歴・文化活動である。もう一つは図書と扁額などの関連資料の分析・評価である。それによって簡斎文庫のもつ高い学術的価値を確定するとともに、昭和初期から戦後期における財界人の漢学教養、ならびに漢学という素養の社会的機能・重要性を考察する手掛かりとする。

キイワード：小倉正恒、簡斎、簡斎文庫、住友総理事、東亜同文書院、『韓非子翼毳』、愛知大学図書館

Ⅰ．はじめに …… 33
Ⅱ．簡斎・小倉正恒 …… 34
　1．生い立ち …… 34
　2．住友での活躍 …… 34
　3．現代中国との関り …… 34
　4．簡斎・小倉正恒略年譜 …… 34
Ⅲ．愛知大学と簡斎文庫 …… 35
　1．簡斎文庫の成立 …… 35
　2．小倉正恒と愛知大学 …… 35
Ⅳ．簡斎文庫の特色と名品紹介 …… 36
　1．日本漢学関係 …… 36
　2．菱園派などの諸書 …… 37
　3．朝鮮本 …… 38
　4．同時代詩文集の収集 …… 38
　5．そのほかの稀覯本 …… 39
Ⅴ．扁額読釈 …… 39
　1．呉昌碩「間斎」扁額 …… 39
　2．楊守敬「五千卷堂」扁額 …… 42
Ⅵ．おわりに …… 43
Ⅶ．参考文献 …… 43
　1．自著・自文 …… 43
　2．伝記類 …… 43
　3．論文・研究書 …… 44
　4．自著以外の刊行書 …… 44
　5．そのほか …… 44

Ⅰ．はじめに

愛知大学図書館を代表するコレクションに簡斎文庫（かんさいぶんこ）がある。これは住友財閥の理事を務めた小倉正恒（号：簡斎）の収集にかかる漢籍群れで、創立まもない愛知大学に入り、新大学の礎となった。収属書の漢籍目録も刊行されているが、小倉簡斎やコレクションの形成過程、特色などについて総合的に語られたことはなかった。所蔵の貴重書コレクションについて把握し公開することは、研究・教育機関として望まれることであろう。本稿によって小倉簡斎ならびに簡斎文庫の意義が知られることになれば幸いである。

加えて、本稿が新図書館の完成を寿ぐこと

になれば幸いである。

Ⅱ. 簡斎・小倉正恒

簡斎文庫は、小倉正恒によって形成された漢籍コレクションである。本章では、小倉の生い立ち、経済界での業績とともに、彼の中国とのかかわりに焦点を当ててその生涯を概観する。

1．生い立ち

小倉正恒（おぐら　まさつね）、号は簡斎（かんさい）。1875年（明治８年）石川県金沢市の旧加賀藩士の家に生まれた。小学校の同級に泉鏡花[1]がおり、ほかにも徳田秋声[2]、西田幾多郎[3]、鈴木大拙[4]らと同郷で年齢も近い。第四高等中学校[5]時代に漢学者・三宅真軒[6]の教えを受けて、漢詩を学び、こののち『史記』を愛読し、折に触れて漢詩で述懐をなした。1897年（明治30年）、東京帝国大学法科大学を卒業し内務省に入った。大学では英法科に学び、のちに欧米に遊学[7]もしたが、思考の基礎は漢学にあったと思しい。また漢詩によって思いを述べることができたことからすれば、漢籍に親しみ、それを使いこなす能力を身に着けていたことも疑いない。

図Ⅰ　簡斎・小倉正恒像（『愛知大学　漢籍分類目録』より転載）

2．住友での活躍

戦前の住友財閥[8]は、現在のような緩い結束の企業グループではなく、住友本社[9]のもとで一体となって企業活動を行っていた。また住友家の当主[10]はほとんど実際の運営にはかかわらず、総理事[11]が全体を統括していた。小倉は1930年（昭和５年）より1941年（昭和16年）までその地位にあった。この時期は、別子銅山[12]に起源をもつ住友が日本を代表する企業集団になり、体制を整えていった時期と重なる。財界人としての活躍を記すことは本稿の趣旨ではないので、詳細は他書を参照されたいが、個人評伝が４種[13]も刊行されていることからもその見識と人望がしのばれる。

3．現代中国との関り

簡斎は、住友退任とともに近衛内閣[14]で大臣を務めた後、南京国民政府[15]全国経済委員会[16]最高顧問となり、それに伴って中国に赴いた。1944年（昭和19年）のことである。敗戦を南京で迎えたあと上海に徙り、1946年（昭和21年）帰国した。以後は教育・文化面で日本の復興に勤めることになる。石門心学[17]・修養団[18]・懐徳堂[19]などにかかわる仕事である[20]。なかでも精力を注いだのは郭沫若[21]在日中の蔵書を基礎とする「アジア文化図書館」[22]の創設であった。1948年（昭和23年）の簡斎文庫の愛知大学[23]への移譲と合わせ、文化理解の基礎としての書籍文化と図書館事業を重視していたことがうかがわれる。いっぽう上海の拠点を失った東亜同文書院大学[24]は、戦後、旧制愛知大学[25]としてスタートを切ることができたが、その際此の簡斎文庫は礎となった。

4．簡斎・小倉正恒略年譜

1875年：３月22日　石川県金沢市に加賀藩士の長男として生まれる。
1880年：金沢養成小学校入学。同級に泉鏡花。
1892年：第四高等中学校本科に入学。三宅真軒の教えを受ける。
1894年：東京帝国大学法科大学英法科入学。学友に美濃部達吉[26]。
1897年：大学卒業、内務省[27]に入る。

1899年：住友に入る。
1900年：商務研究のため英仏独米へ出発。1902年帰国。
1904年：日露戦争起こる。大徳寺に参禅。
1913年：住友総本店支配人[28]。
1916年：中華民国、満州、朝鮮視察。
1927年：懐徳堂記念会[29]理事長。
1929年：中華民国、満州、朝鮮視察。
1930年：住友合資会社[30]第６代総理事。
1932年：大阪府立図書館商議員。
1933年：貴族院議員[31]。
1937年：株式会社住友本社[32]代表取締役、総理事。
1941年：太平洋戦争起こる。総理事退職。近衛内閣国務大臣、大蔵大臣。
1943年：東亜同文会理事。この年、上海、南京、北京、新京歴遊。
1944年：南京国民政府経済最高顧問として訪中[33]。
1945年：敗戦。８月上海へ移る。
1946年：３月、上海より帰国。貴族院議員ほか政治経済関係諸役員辞任。
1947年：公職追放。（1951年解除）
1948年：住友本社解散。簡斎文庫を愛知大学に譲渡。
1952年：石門心学会会長。
1956年：沫若文庫（アジア文化図書館）建設委員長。
1961年：11月20日歿（87歳）。法諡、正覚院殿恒心簡斎大居士。青山墓地に葬らる。

Ⅲ. 愛知大学と簡斎文庫

１．簡斎文庫の成立

小倉簡斎はあくまで財界人であり、漢学に関して教育・研究の立場に就くことは無かった。彼の蔵書が充実しているのは、実用というよりも彼自身の漢学癖にその理由があると思しい。彼は金沢時代に三宅真軒らの薫陶を受け、生涯を通じて漢詩を折に触れて作成するだけの漢学の素養を持っていた。そして漢詩の制作には少なからぬ書籍が手許に必要なのも事実である。しかし簡斎文庫という漢籍コレクションは、それら漢詩制作上の必要性をはるかに超える充実を見せている。それには、漢詩の師でもある木蘇岐山[34]の没後（1916年（大正５年））、その蔵書を引き承けた[35]こと、財界人としての中国との往来に伴う交友に要因があると思われる。

２．小倉正恒と愛知大学

簡斎は晩年、東京に３か所、関西には兵庫県の垂水と大阪の阿倍野に地所・建物を所有していたが、いずれも空襲などの火災を罹らなかった。蔵書は阿倍野の松風荘[36]に置かれ、失われずに済んだ。また簡斎は様々な文化事業にかかわった。例えば以下のものが挙げられる。

1916年　財団法人懐徳堂記念会理事（1927年理事長）
1935年　東洋文庫[37]の理事
1930年　大阪商科大学[38]（現・大阪公立大学）商議員
1931年　帝室博物館[39]復興翼賛会監事
1932年　大阪府立図書館[40]商議員
1943年　東亜同文会[41]理事

簡斎は蔵書を当初懐徳堂に寄付する心づもりであったようであり[42]、1944年には大阪市立大学の山根徳太郎[43]に整理と蔵書目録の作成を依頼していた。山根は「難波宮」[44]発見で知られる考古学者である。「その尽くの克明な書目解題を完成した」とされるが、書目、解題ともに愛知大学には伝存していない。

1948年（昭和23年）に、簡斎の蔵書は愛知大学に移譲された。かつて1943年（昭和18年）に簡斎は東亜同文会の理事となっていたし、それに先立って1929年（昭和４年）上海訪問の際は同文書院を見学、東亜同文書院出身の上海住友洋行[45]支配人・福田千代作[46]が現地

案内を務めており、東亜同文書院を意識することも多かったであろう。『愛知大学漢籍分類目録』例言には「簡斎文庫は、昭和二十三年、東亜興業社長梅村清氏（現本学監事）のご厚意により本学に譲渡された簡斎小倉正恒先生の旧蔵書である」と記す。梅村氏[47]は、豊橋出身の実業家である。上記漢籍分類目録には、詳しくは記載されていないが、梅村氏が買い上げて愛知大学に寄贈したものらしい[48]。また「本書の編纂には、文学部教授内藤戊申[49]と図書館司書鈴木清水が終始その事に当たり、中途に、当時文学部副手[50]であつた今泉潤太郎[51]、藤井宣丸[52]両君の参加を見、かつ新村徹[53]君等学生諸君の助力をも得た」と記す。先に記したように、簡斎所蔵時代に山根徳太郎による書目解題が存在していたはずであるから、愛知大学への譲渡に当たっては、内藤戊申（東洋史）や図書館学の見地からの見識を加えてこの漢籍目録となったと思しい。当時副手として編纂に携わられた今泉潤太郎名誉教授は、内藤戊申教授の綿密な仕事ぶりを今でも明瞭にご記憶[54]である。

なお当初企図されていた懐徳堂ではなく、愛知大学へ譲渡されたことに関しては、諸書を検するも経緯は不明である。ただし「簡斎文庫漢籍分類目録」には題字は「特に懇望して小倉簡斎先生に揮毫をお願いした」とあり、簡斎自身も愛知大学への譲渡を承知し、協力的であったことは疑いない。また上海にあった東亜同文書院は、敗戦によってほとんどの資産を失った。そのほかの本土外教育機関の学生や教員が一体となって設立したのが愛知大学である。幸いに豊橋の旧陸軍予備士官学校跡[55]に地を得ることができたが、学術資産はほぼ無きに等しかった。その状況に、かつて東亜同文会の理事も務めたことのある小倉は、支援の意を強くしたのかもしれない。長くかかわった懐徳堂のほか、無窮会[56]東洋文庫、帝室博物館、大阪府立図書館などでなく、愛知大学に簡斎文庫が移譲されたことをありがたく思う。なお同漢籍分類目録には「写真の簡斎先生寿像は、文庫と共に本学図書館の所蔵にかかる」と記されるが、のち住友銀行の要望により、譲渡されて、愛知大学は現在所蔵していない。住友の人々の簡斎への敬慕の情のなお強いことを知ることができよう。

Ⅳ. 簡斎文庫の特色と名品紹介

簡斎文庫の所蔵書籍部数は以下の通りである。

経部291種／史部214種／子部327種／集部630種／叢書部30種など

総点数は、漢籍・国書併せて約30,000冊である。中国学研究者ではない財界人の個人蔵書としては、特記すべき分量と言ってよい。もちろん実業界がかかわった漢籍図書コレクションとしては、三菱の静嘉堂文庫・東洋文庫、安田財閥の安田文庫、五島の大東急記念文庫などがあるが、それらは図書コレクションを目指して成立したもので、個人利用のためのものではない。略歴にも記したように簡斎は漢籍に親しみ、漢詩を作り、思考の拠り所としていた。したがって簡斎文庫は、上記の諸財閥図書コレクションとは性格を異にするものといってよい。

個人利用を目的に形成された簡斎文庫であるが、実用一辺倒ではなく、以下のような特色を持つ。日本漢学への注目、朝鮮本の比重大、同時代詩文集の収集というような特色である。

1．日本漢学関係

簡斎文庫に収められる江戸期漢学の書は、和刻本がその大半を占めるが、未刊行の鈔本の存在が注目される。なかでも『韓非子翼毳』鈔本は、木活字本刊行以後の著者自身による考訂作業の成果を保存している点で貴重である。そのほかにも、安井息軒の『周礼補疏』、亀井昭陽の『礼記抄説』など、著名漢学者の

著作のうち、当時未刊行のものも含まれる。さらに刊本からの筆鈔と思われる諸本も、当時のテキスト流布の実態をうかがわせる好資料である。上述のように、これら漢学関係の書籍は、漢詩の師でもある木蘇岐山蔵書を承け継いだことに因るかもしれない。その主要なものを解説する。

・『韓非子翼毳』（太田方 撰）子部・81・Ⅰ・1～8

『韓非子』に、江戸時代の漢学者・太田方が注釈をつけたもの。中国古典に語彙の用例を丁寧に探索して読みを確定させてゆく手法は、中国に先駆けて科学的文献学、考証学を確立したものとして、「江戸末期の漢学者の実力を存分に発揮したもの」とされる[57]。また『韓非子翼毳』は著者個人による木活字印刷出版[58]として著名だが、活字本刊行後も著者による研究・改定は続けられた。最も普及する漢文大系本[59]は木活字本を底本としているが、簡斎文庫本は木活字本[60]以後の著者自身の研究成果も取り込んでいる点で極めて貴重である。この鈔本作成の経過を通して、江戸期における研究成果の刊行、校訂の有様もうかがうことができる。筆鈔者永山近彰[61]は簡斎と同郷で大学の同窓であり、交流も密であった。この書をはじめとして、金沢の人脈の中で入手したと思われる書籍が少なからずある。[62]

『韓非子翼毳』全篇の書影が愛知大学図書館リポジトリにアップロードされている。

・『周礼補疏』（安井息軒）経部・98・Ⅰ

幕末・維新期の儒学者安井息軒[63]の『周礼』[64]講義を弟子が記録したもので、内容は、『周礼』読釈に必要な情報を既存の諸書から、抜き出した講義の手控えである。息軒は江戸に出たあと、多くの弟子を育て、中には谷干城[65]、陸奥宗光[66]など、明治期に活躍した人士も多く、その学統は明治以後の漢学研究の大きな流れとなった。本書は鈔本しか伝存せず、今回の電子書影の公開が初の公刊がとなる。幕末という動乱の時代に、人々が古代中国の理想国家体制論を読んでいたことは興味深い。情報収集や思想把握ではなく、古典を読むという行為によって、他者の思考を論理的にトレースするという、学術行為の一つの形をあらためて示す書籍である。

『周禮補疏』全篇の書影が愛知大学図書館リポジトリにアップロードされている。

・『礼記抄説』（亀井昭陽）経部・112

江戸後期、福岡藩[67]の著名な儒学者・亀井昭陽[68]が、『礼記』を読み進める上で、問題個所を抜き出し、それに諸本との校勘や先行注釈を書き加えたもの。町田三郎の解説を付した亀陽文庫[69]所蔵抄本が亀井南冥・昭陽全集として景印出版されている[70]が、残念ながらモノクロであり、朱による読点、返り点、送り仮名の判別が困難であった。今回、愛知大学図書館リポジトリでのカラー画像公開によって、昭陽の読みが、いっそう明快にトレースできるようになった。なお筆抄者は不明である。

『禮記抄説』全篇の書影が愛知大学図書館リポジトリにアップロードされている。

2. 護園派などの諸書

鈔本の中には、荻生徂徠及びその学派にかかわる著作が少なくない。『物氏三経集説』、『論語徴集覧』、『周易解』などがそれである。また、徂徠学を伝承した庄内藩[71]の白井重行[72]の手にかかるものや、徂徠学徒である戸崎淡園[73]のものも確認できる。ただしこれら護園派の諸書を、簡斎が意図をもって収集したものか、先行コレクターのものをまとめて入手

したものかは明らかでない。鈔本として未刊行のものも、刊本の筆写と思われるものもある。上記亀井昭陽のものも諺園の流れの中でとらえるべきかもしれない。

・『物氏三経集説』

徂徠の経書に対するコメントを諸書から集めたもので、「物氏六経総論」「物氏周易集説」「物氏尚書集説」「物氏毛詩集説」からなる。

CiNii、国書データベース(国文学研究資料館)、全國漢籍データベース（全国漢籍データベース協議会）では簡斎文庫所蔵本以外の所在を確認できない。

・『論語徴集覧』

『論語徴』[74]とそれに関するデータを源頼寛[75]が集めたもの。文化九年刊本、寶暦十年刊本が比較的多くの図書館に所蔵されており、京都大学蔵本がオンラインで公開されている。

（https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013005）

・『周易解』

徂徠の「遺訓」を鶴岡庄内藩の白井重行が収集したもの。「荻生徂徠遺訓、白井重行撰」と記される。文化四年序致道館刊本が国内各所に所蔵され、国立公文書館がカラー書影を公開している。

（https://www.digital.archives.go.jp/img/1238739）

なお庄内藩は寛政異学の禁[76]の中でも藩学に徂徠学を置き続けた稀有な藩である。

3. 朝鮮本

分量的に極めて大きいわけではない簡斎文庫の中にあって、朝鮮本の数の多さは顕著であり、経部から集部までジャンルも大きな広がりを持つ。四部分類に従えば種数は以下の通り。

経部：８部　史部：７部　子部：９部
集部：58部　　計：82部

国内の朝鮮本コレクションとしては、東京大学小倉文庫（小倉進吉旧蔵[77]）と大阪府立図書館コレクション[78]が双璧であり、簡斎文庫は量的にも質的にも及ばないが、両コレクション未収書もあり、版を異にするものも多い。

ただ簡斎の文集である『小倉正恒談叢』[79]や伝記類にも、朝鮮儒学や朝鮮本についてとりわけての関心は示されていないので、朝鮮本の収集にあたって簡斎に特別な動機や計画があったのか不明である。またその入手経路についても明らかにしがたい。なお簡斎は1916年（大正５年）、住友総本店総理事の鈴木馬左也[80]に随行して朝鮮を視察している[81]。所蔵朝鮮本の７割を占める集部書のうち、さらにその50種は、朝鮮人著述文集である。

『兵学指南』『兵将図説』『喪礼備要』は全巻の書影が愛知大学図書館リポジトリにアップロードされている。

4. 同時代詩文集の収集

簡斎文庫には多くの個人詩文集が収められているが、古い時代の古典ともいうべきものに加え、近い時代、清朝でも末期から中国近代の詩文集が多く収録されている。これは古典研究者ではなく、漢詩文製作者という簡斎の文学活動に適うものと言える。また中国を視野に入れた経済活動の中で現地の人々との交流を深くしていたこととともかかわるであろう。後述するように豊橋図書館に掲げられる扁額は同時代最高レベルの文化人である楊守敬と呉昌碩によるものである。収蔵書籍のなかから特徴的なものとしては『行有恒堂初集』『小谷口詩鈔』などがあり、これらは日本では簡斎文庫のみが所蔵している。[82]同時代の文学動向にかかわっては、師の木蘇岐山は、専ら杜甫などのスタイルを尊重し、時代の趨勢に敏感であった森春濤・大沼椿山らとは流

れを異にしたといわれるが、簡斎は、制作した詩文自体の傾向はともかく、同時代中国の文学活動にかかわりを持っていたことは疑いない。

5. そのほかの稀覯本

上記以外にも、東洋書誌学史上注目される書も見える。

・『李義山詩集』[83]三巻：簡集[82]

唐・李商隠[84]撰 清・朱鶴齢[85]箋注 順治十六年序 朱氏素位堂刊本　２冊 清・紀昀[86]手批本

簡斎は『小倉正恒談叢』[87]中の「漢詩一夕話」に「李義山の人となり」という項目をたてて、陶淵明[88]・白楽天[89]・蘇東坡[90]らとともにその詩への愛好ぶりを示す。加えて李義山については特に「無題詩浅釈」として読釈を加えている。そしてここに掲げた『李義山詩集』には、四庫全書総纂官であった紀昀の手批が記されている。紀昀には『李義山詩集』への「点論」や『玉溪生詩説』二巻などの著作もあり、紀昀手批の存在は首肯され、

また注目される。紀昀の李義山詩理解のトレースが、本書によって詳細・分明になることが期待される。

Ⅴ. 扁額読釈

愛知大学豊橋図書館事務ブース横の壁面に、呉昌碩と楊守敬の扁額が掛けられている。本章ではこの２点を読み解くことを通して簡斎の交友と書籍コレクション形成を明らかにしたい。

1．呉昌碩「間斎」扁額

簡斎が呉昌碩と交流を持っていたことは、この扁額によって明らかである。扁額は1916年、小倉簡齋が中国訪問の際、呉昌碩から得たもので、簡齋文庫とともに愛知大学に移譲されたものであろう。

以下、この扁額を解読する。

・朱文方印「雄甲辰」（釋１）

・墨書「間斎」（釋２）

・「昨爲間斎鑿小印（釋３）、已知間老似飛仙（釋４）、何時看出榑桑日（釋５）、尋着林亭浅水邊（釋６）」

【訓読】昨に間斎の爲に小印を鑿（ほ）りたり、已に知る間老の飛仙に似たるを、何時か榑桑の日を看出して、尋（たず）ねて林亭浅水の邊りに着かむ。

【和訳】以前、簡齋のために印を彫ったことがある。その時以来の付き合いで簡齋が仙人のような人物であることは承知している。何時か機会を得て日本を訪問し、（『海内十洲記』に記されるような荒れた海を越えて）自然に恵まれた景色の良いところに行ってみたいものだ

・丙辰（釋７）端陽（釋８）　呉昌碩　老缶（釋９）

・朱文方印「俊卿之印」（釋10）　白文方印「倉碩」（釋11）

釋１：「雄甲辰」朱文方印

「甲辰に雄たり」と読むか。なお「甲辰」が年をあらわすとすれば、近いところでは1904年がそれにあたる。

しかしこの年に呉昌碩が「雄」であったような事蹟は見当たらない。或いは前年に西湖湖畔に起こした篆刻結社・西泠印社の社長となったことを言うか。なお同印が、「呉昌碩松石圖軸　丙辰（1916年）製作　（上海博物館所蔵）」に捺されている（『中国書畫家印鑑款識』（上海博物館編 1987年　北京・文物出版社）所載）。製作も同年であり、呉昌碩がこのころ多用していたものであろう。

釋２：「間斎」

小倉正恒の書斎名は「簡齋」であり「間斎」ではないが、「簡」字と「間」字は、通じる。『釋名』巻４・「釋言語」に「間、簡也。事功簡省也」とある。通用字として理解されていたのであろう。

釋３：昨爲間斎鑿小印、

呉昌碩がここで言及した簡斎のための小印に当たると思われるものが巷間の簡斎軸上に見える。以下の点で扁額の文字と共通点がある。

釋４：已知間老似飛仙

「飛仙」は空を飛ぶことが出来る仙人。漢代の東方朔が記したとされる志怪小説『海内十洲記』・方丈洲に「（蓬萊山）は周迴五千里にして、外に別に圓海有りて山を繞（めぐ）る。圓海は水　正に黒く、而れば之を冥海と謂ふなり。風無きに洪波百丈ありて、往來するを得べからず。……惟だ飛仙のみ能く其の處に到ること有り。（（蓬萊山）周迴五千里、外別有圓海繞山。圓海水正黒、而謂之冥海也。無風而洪波百丈、不可得往來。……惟飛仙有能到其處耳。）」とある。蓬萊山の周りの海は、無風でも波が高く、「飛仙」だけがそこに到達できるという。この蓬萊山は、後に出る「榑桑」＝「扶桑」と同じく、日本のことを指す。また『史記』・封禪書には、「威・宣・燕昭自り人をして海に入りて蓬萊・方丈・瀛洲を求め使む。此の三神山は，其れ傳して勃海中に在り」とある。

つまり簡齋を仙境からやってきた人物とみなして、第３句、第４句は、次は機会を得て自らがそこに赴かんという戯詩であろう。ちなみに1916年（大正

５年）の訪中は、住友総本店総理事・鈴木馬左也に随行するもので、３月１日神戸港を日本郵船の熊野丸で出帆した[91]。

釋５：何時看出槫桑日

「槫桑」は、伝説中の神木。「扶桑」と同音類義で日本を意味する。また日本人・松丸東魚が編輯し日本で刊行した呉昌碩の印譜は『缶廬槫桑印集』（1965跋）と名されており、呉昌碩が日本を指すのに「槫桑」という表現を好んだことが判る。

釋６：尋着林亭浅水邊

「林亭浅水の邊り」の意が明確でない。先に引いた『海内十洲記』の荒海と対比させたものか。或いは簡齋に関係して具体的な場所が想定されていたかもしれないが、現時点では不明。

釋７：丙辰

西暦1916年、中華民国５年、大正５年、この年簡齋は住友総本店総理事・鈴木馬左也に随行して中国・満洲・朝鮮を視察している。

釋８：端陽

「端陽」は端午と同じく５月５日のこと。川田順「随行紀程」によれば、五月初めに簡齋一行は北京・天津あたりにおり、呉昌碩の住む上海にはいない。

釋９：呉昌碩　老缶

呉昌碩の事歴については、扁額横の銘板に以下のように記されている。

呉昌碩　ごしょうせき（1844 ～ 1927）中国　浙江省安吉の人。名は俊卿、字は昌碩、昌石、倉石。号は缶廬、苦鉄、破荷など。篆刻、書、絵画、詩文に優れ、とくに篆刻では後に続く人々へ大きな影響を残す。呉昌碩の諸芸の基底は石鼓文への没入とされ、これによって篆法を学び、書や絵画もこの法に則っている。

篆刻、書、篆刻はまちがいなく、西泠印社の設立とともに、新たな芸術領域を開いたものとして高く評価してよい。この扁額の文字も、彼独特の石鼓文スタイルの文字であるが、むしろ篆刻に合わせたスタイルと言える。

釋10：朱文方印「俊卿之印」

「俊卿」は呉昌碩の字（あざな）である。『中国書畫家印鑑款識』にはこれと同印は見えないが、「俊卿之印」「俊卿印記」などの文字を多用していたことは確認できる。

釋11：白文方印「倉碩」

「倉碩」も呉昌碩の号であるが、『中国書畫家印鑑款識』にはこれと同印は見えない。ただし、「倉碩」「倉石」などの文字を多用していたことは確認できる。

結論として以下のことが明らかになった。先にも引いた川田順の「随行紀程」に「四月七日、金曜。晴。高名の画家呉昌碩に面会せんと欲したるも、病中とのことにて断念す」とあり、簡齋一行はこの時、呉昌碩に面会できていないようである。しかし「昨（さき）に」小印を彫ったと言うから、以前から交流はあったのであろう。今回面談がかなわなかったために、呉昌碩は後日この扁額用の揮毫を為して簡齋に贈ったのであろうか。

なお「随行紀程」四月五日の項には「水曜。晴。清明節なり。午前、東亜同文書院の大村教授、学生両三名を伴ひて来訪す」と記録されている。蓋し大村欣一のことであろう。『東

亜同文書院大學史』には、大正10年３月の教授陣に、担任学科支那政治・制度・通商史としてその名が見え（同書119ページ）、「二十期前後の教授点描」によれば、石川県出身で東京帝大出の文学士とあるので、簡齋とは同郷、同窓である（同書264ページ）。

２．楊守敬「五千卷堂」扁額

同じく壁面には楊守敬の筆になる「五千卷堂」という扁額が掲げられている。まず扁額の写真を掲げる。

この蔵書と共にあるのがふさわしい。よって蔵書と共に愛知大学に移譲せられたのであろう。

墨書部分は

・「五千卷堂」（釋１）
・岐山先生属（釋２）（岐山先生属（たの）む）
・楊守敬（釋３）

からなり、右上ならびに左端に印記が見える。

- 右上朱文方印「三葉遘武七秩離折」
- 左白文方印「楊守敬印」、
- 朱文方印「鄰蘇老人」

釋１：「五千卷堂」：

「五千卷堂」は簡齋の漢詩の師・木蘇岐山の書斎名で、簡斎は岐山の詩集『五千堂集』を編纂・出版している。岐山蔵書が簡斎のもとに移った経緯については、上述した。すなわちこの蔵書こそが岐山の号の由来であり、扁額も、

釋２：属：

「属」は、其人の依頼によって記したことをあらわしている。すなわちこの「五千卷堂」の揮毫が、木蘇岐山からの依頼によってなされたことを意味する。

釋３：楊守敬：

1839年－1915年。楊守敬の書家及び書誌学者としての活動については膨大な研究蓄積がある。また著作は『楊守敬集』全13巻（謝承仁主編　1988-1997湖北人民出版社）に纏められ出版されている。

ここで、木蘇岐山と楊守敬の関係を考えねばならない。岐山には簡斎が編集刊行した文集『五千卷堂集』がある。ところがその中に楊守敬に関わる文辞は見いだせない。楊守敬は、当時日本

で極めて著名であり、知遇があれば、言及するのが普通であろう。ここに言及が全くないことは、岐山が楊守敬と直接の知遇関係にはなかったことを示すのではないかと推測もされる。あるいは簡斎が間に入るようなことがあったのかもしれないが、これ以上の情報はない。

Ⅵ. おわりに

2021年に愛知大学担当で日本中国学会第73回大会が開かれたが、時節柄完全オンライン開催であり、当初企画していた図書展示もウェブ上で行われた。

それとは別に簡斎文庫の再調査も進められていて、改訂版『簡斎文庫漢籍目録』も刊行の予定であり、同時に資料のディジタル化も進められ、現時点で完了したものについては、本文中にURLを記しておいた。

本稿では簡斎文庫所収書から幾点かを紹介したが、コレクションの全体像と意義は十分には解明されていない。今後も研究を進めてゆきたい。

なお本テーマは、日本中国学会での図書展示のための作業として調査を開始し、ウェブページとしてその成果を簡易的に提供したが、広報･宣伝の域を出るものではなかった。今回、学術的考究として抜本的に目的と記述を改めて充実させたものである。

Ⅶ. 参考文献

1．自著・自文

- 『蘇浙游記』（小倉正恒著　1929年　小倉正恒刊）
- 『滬甯訪問記』（小倉正恒著　1943年　小倉正恒刊　未見）
- 『小倉正恒談叢』（小倉正恒著　1955年　東京・好古庵刊）
- 「国民道徳に就て：小倉総理事講演」（小倉正恒述　1938年　出版者不明“昭和13年９月25日大阪中央放送局より放送”とあり放送原稿か）
- 「関西方面に於ける電力不足に就て」（小倉正恒述　1940年刊　［出版者不明］大阪市立大学 学術情報総合センター所蔵）
- 「わが人となりし家庭」（小倉正恒著　1942年「婦人之友」第36巻第１号）
- 「北支を視察して」（小倉正恒述　1944年　日本経済聯盟会刊）
- 「私の生活信条－実業人の心構え」（小倉正恒著 1953年 「実業の日本」第56巻第１号所収）
- 「アジア文化興隆の大眼目」（小倉正恒著　嘉治隆一編『第一人者の言葉：同時代人と次代人とに語る』1961年　東京・亜東倶楽部刊所収）
- 「東洋の心―序に代えて」（『アジア文化の再認識―アジア文化図書館開館記念論文集―』アジア文化図書館編、1957年　朝日新聞社発行）

そのほか『（住友本）小倉正恒』に遺稿として多数採録されている。

2．伝記類

- 『小倉正恒伝』（栂井義雄著　1954年　東京･東洋書館刊　日本財界人物伝全集第10巻「古田俊之助伝」と合冊）
- 『小倉正恒』（神山誠著　1962年　東京・日月社）
- 『小倉正恒』（株式会社住友銀行内小倉正恒伝記編纂会編纂1965年、同会発行　『（住友本）小倉正恒』と表記する）
- 『住友の哲学―晩年の小倉正恒翁の思想と行動』（菊地三郎著　1973年 東京・風間出版株式会社刊）

3．論文・研究書

- 「財閥経営者の準拠集団行動史―小倉正恒を中心として／瀬岡誠著」（『経済史経営史論集：日本経済史研究所創立五十周年記念／大阪経済大学日本経済史研究所編 1984年 大阪・大阪経済大学刊』）
- 『財閥経営者とキリスト教社会事業家―財閥経営者とキリスト教社会事業家：小倉正恒と留岡幸助の連帯性の形成過程を中心として』（瀬岡誠著 国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告／国際連合大学74；85)
- 「住友におけるモノづくりの思想と人間―小倉正恒を中心に」（瀬岡誠著　社会科学（同志社大学人文科学研究所）60, 1998）
- 「愛知大学の中国関係コレクション：大学図書館の礎「霞山文庫」を中心として」桂三幸　アジ研ワールド・トレンドNo.138　ｐ26 ～ 29.　2007年３月。
- 「コレクション紹介「竹村文庫」について」鈴木立子　韋編（愛知大学図書館報）No.38 p11 ～ 12。
- 愛知大学図書館のコレクションに関する特徴と研究動向　加藤好郎（「御成門新報　まなぶ」所載　2017.4.25
- 「知を愛するもの　愛知大学に簡齋文庫を寄贈」（『実録 昭和太閤記ー梅村清波乱の生涯』斎藤健治 文　梅村昭允 編集・発行 302-347ページ）
- 『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌』大学史編纂委員会編集1987年滬友会発行
- 一号一得（６）長寿のひけつ―小倉正恒（童門 冬二 公営企業／地方財務協会 編 35 (6) 2003）
- 修養団と財閥経営者―１―渋沢栄一と小倉正恒を中心として（瀬岡誠 京都学園大学論集11(2)1983）
- 小倉正恒―住友財閥総理事が歩んだ理想と現実（鈴木謙一 現代の眼21(8)　1980）
- 書評「小倉正恒伝記編纂会（住友銀行内）発行「小倉正恒」」栂井義雄「経営史学」1(2)1966-09）
- 書評「小倉正恒伝記編纂会(住友銀行内)発行「小倉正恒」」堀江保蔵「社会経済史学」32(2) 1966
- 「前理事長小倉正恒翁追憶錄」（鈴木虎雄、神田喜一郎、貝塚茂樹、吉川幸次郎、木村英一ほか「懐徳」33 1962）

4．自著以外の刊行書

- 『星巖集註』（梁緯公圖撰／木蘇牧註　1928年　上海・小倉正恒刊　梁川星巖、木蘇牧ともに美濃の人。木蘇牧（岐山）は簡斎の漢詩の師）
- 『五千巻堂集』（木蘇牧著／石野徹註／小倉正恒校刊　1935年　小倉正恒刊）

5．そのほか

- 『愛知大学漢籍分類目録』（1960年　愛知大学図書館 編集竝発行）
- 『愛知大学五十年史』（2000年 愛知大学）
- 『東亜同文書院大学史』（1982年 滬友会）
- 『住友回想記』（川田順　1951年（昭和26年）東京・中央公論社。簡斎の朝鮮・中国行の随行記録である「随行紀程」を収録する。
- 「愛知大学図書館簡齊文庫を訪れて」（大木康 愛知大学図書館「韋編」49号2022年）
- 『アジア文化の再認識―アジア文化図書館開館記念論文集』（1957年　アジア文化図書館編　朝日新聞社発行）
- 『アジア・アフリカ文化財団の二十五年』（1982年 アジア・アフリカ文化財団史編集委員会　同財団発行）

注

1　泉鏡花：本名は泉鏡太郎。1873年（明治６年）－1939年（昭和14年）。石川県金沢市下新町生まれ。金沢高等小学校に進学し、のち尾崎紅葉に師事。

2　徳田秋声：1872年（明治4年）－1943年（昭和18年）。本名、末雄。小説家。金沢市横山町生まれ。第四高等学校に進学するも中途退学。

3　西田幾多郎：1870年（明治3年）－1945年（昭和20年）。加賀国河北郡森村生まれ。石川県専門学校（のちの第四高等中学校）に学ぶも、退学し東京帝国大学選科に入学。のち京都帝国大学文科大学教授（宗教学）。鈴木大拙とは第四高等中学校同学年。

4　鈴木大拙：金沢市下本多村（現・本多町３丁目）生まれ、本名は貞太郎。1870年（明治３年）－1966年（昭和41年）。禅仏教学者、居士、著作家。

5　第四高等中学校：1887年（明治20年）官立の第四高等中学校として発足。1894年に第四高等学校と改称。さらに1949年（昭和24年）に金沢医科大学、石川師範学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢工業専門学校などと統合して新制・金沢大学となった。

6　三宅真軒：『小倉正恒談叢』中「先輩の風格」に「三宅真軒翁」の項目が建てられ、簡斎から見た真軒の姿が詳細に描かれている。その冒頭には「明治中期の金沢では「書は心泉、詩は岐山、文は休哉、経書は真軒」との定評があった」と記される。なおその蔵書は無窮会に移管されて真軒文庫となり、『真軒先生旧蔵書目録』（昭和８年　無窮会）も刊行されているが、その巻頭にも真軒の学問や生活が詳しく記されている。

7　欧米に遊学：明治33年3月－明治35年12月。訪問地は英国、フランス、ドイツ、米国。この遊学は、住友入社の際に簡斎が出した条件であったという。（『小倉正恒伝』 栂井義雄 1954年　東京・東洋書館刊34ページ）

8　戦前の住友財閥：住友グループの歴史に関しては以下の書を参照した。『住友の歴史（下）』（朝尾直弘監修、住友史料館編集2014年 思文閣出版）

9　住友本社：グループ統括会社は、住友本店、住友総本店（1909～）、住友合資会社（1921～）と続き、1937年改組して住友本社が成立。1946年解散。

10　住友家の当主：1893年～1926年は15代友純（ともいと、徳大寺家より養子）、1926年～1993年は16代友成（ともなり）

11　総理事：「重役会を構成する理事から選任され、住友の全事業を総理する」役職である。（『住友の歴史（下）』197ページ）

12　別子銅山：江戸時代以来の住友家の主業務であった。

13　個人評伝が４種：上記、参考文献伝記類の項目参照。

14　近衛内閣：第２次近衛内閣（1940年－1941年）の国務大臣、第３次近衛内閣（1941年）の大蔵大臣を務める。

15　南京国民政府：1927年南京にできた国民党指導下の政府。

16　全国経済委員会：「全国経済委員会与西北開発」（張力　珠海文史研究所学会主編『羅香林教授記念論文集』新文豊出版1992年）に詳しい記述がある。

17　石門心学：石門心学と住友のかかわりについては、以下の文章がある。「石門心学と住友精神」新宮康男（住友金属工業名誉顧問）「住友史料叢書「月報」23号2008年　https://www.shiryokan.jp/geppou/pages/23th_2.html）
また『小倉正恒談叢』中「日本の道徳団体」に「石門心学」の項目が建てられ、簡斎から見た石門心学が描かれている。そこには「此の心学も当時（享保時代をいう）のかような社会の混乱を背景とし、教化の振興の急務が痛感されつつあった時代に誕生したものだ。終戦後の今日と同じシチュエションにあるのは興味深い。」とあり、戦後の混乱期に有用な道徳として石門心学をとらえていたことが判る。

18　修養団：修養団は、1906年に蓮沼門三が作った社会教育団体。精神修養と報告思想を身上とする。経済界とのつながりについては佐高信「日本の企業と修養団」（『佐高流経済学入門』晶文社、2003年、145－148頁。）

19　懐徳堂：研究書は多いが、手軽な解説として『懐徳堂－近世大阪の学校』（1986年　大阪市立博物館）を挙げておく。

20　簡斎をはじめとする住友幹部の宗教界、修養団体とのかかわりについては、『住友財閥史』（作道洋太郎編1979年　教育者）中の「住友の経営理念」（執筆は藤岡誠）に詳しい。

21　郭沫若：1892－1978。日本留学後、日中戦争時には帰国して重慶の国民政府軍事委員会政治部庁長。中華人民共和国成立後は政務院副総理、科学院院長。中日友好協会名誉会長。『中国古代社会史研究』、『卜辞通纂』などを著す学者でもあった。全17巻にも及ぶ「郭沫若全集」（1982年人民文学出版社）も刊行されている。

22　アジア文化図書館：日本留学時代の郭沫若蔵書を保存することから発展して、「日本におけるアジア文化研究のセンター」となることを目指して1957年設立された。簡斎は発起人会代表を務め、成立後は理事長となった。
・『アジア文化の再認識』（1957年　アジア

文化図書館編　朝日新聞社発行）
・『アジア・アフリカ文化財団の二十五年』（1982年 アジア・アフリカ文化財団史編集委員会　同財団発行）

に詳しい。現在、公益財団法人「アジア・アフリカ文化財団」として、東京都三鷹市新川５－14－16で活動中である。

なお簡斎とは別に愛知大学は『中日大辞典』編纂にかかわって郭沫若と深いかかわりを持っている（『愛知大学五十年史』通史篇（2000年 愛知大学）293ページ）。

23　愛知大学：『愛知大学五十年史』（2000年 愛知大学）参照。

24　東亜同文書院大学：『東亜同文書院大学史』（1982年 滬友会）参照。

25　戦後、旧制愛知大学：愛知大学は1946年11月15日に旧大学令によって創立認可を受け、1947年１月15日に開講式を行っていたが、その後1949年4月1日新制大学に発足･移行（総長：林毅陸）した。校地は、旧陸軍（第一）予備士官学校跡である。

26　美濃部達吉：1873年（明治６年）－1948年（昭和23年）日本の法学者。東京帝国大学名誉教授。天皇機関説を主張し、大正デモクラシーの代表的理論家。第一高等中学校から、1894年（明治27年）、帝国大学法科大学政治学科に進み、1897年（明治30年）に卒業した。美濃部も簡斎と同じく内務省にいったん籍を置いている。

27　内務省：旧憲法下の行政機関で内政・民政を担った。簡斎も山口などの地方に官吏として赴任している。

28　住友総本店支配人：1908年住友本店を住友総本店に改称。支配人はそのトップ。

29　懐徳堂記念会：明治２年に閉校した懐徳堂を承け、大正５年（1916年）から昭和20年（1945年）まで「重建懐徳堂」（昭和20年（1945年）大阪大空襲により懐徳堂校舎を焼失）を運営。現在は懐徳堂に関する研究・顕彰活動を行っている。なお重建懐徳堂の蔵書は大阪大学に移管され、大阪大学附属図書館内に懐徳堂記念文庫となり、また文学部内に懐徳堂センターが設置されている。

30　住友合資会社：1921年、住友吉左衛門の個人経営であった住友総本店から改組。（『住友の歴史』下222ページ）

31　貴族院議員：1933年、貴族院議員に勅選

32　株式会社住友本社：住友合資会社を改組して1937年設立。

33　昭和十九年（1944）、当時の中華民国（汪兆銘政府）駐日本大使蔡元培が、東京の大使館において、重陽の節句に、当時の学者や政治家を招いて宴会を開いている。「愛知大学図書館簡齊文庫を訪れて」（大木康「韋編」49号）参照。

34　木蘇岐山：1857年（安政４年２月27日）生、1916年（大正５年７月28日）没。美濃（岐阜県）の人。小川果斎の名で「熙朝風雅」という漢詩文雑誌（1883－1886）を主宰し、京阪を中心に一大詩壇を形成した。（『日本漢文学大事典』による）

名は僧泰・牧。字は自牧。号は岐山、果斎、三壺軒主人、五千巻堂。生地は美濃。大正７年没、享年61。師は野村藤陰。本姓は小川氏。（『漢文学者総覧』（長澤規矩也監修1979年汲古書院）による）没年に諸書で差がある。

また『小倉正恒談叢』中「先輩の風格」に「木蘇岐山先生事略」の項目が建てられ、簡斎から見た真軒の姿が漢文で詳細に描かれている。その冒頭には「明治中期の金沢では「書は心泉、詩は岐山、文は休哉、経書は真軒」との定評があった」と記されている。

なお簡斎は岐山の詩文集『五千巻堂集』十七巻六冊を出版するとともに、岐山の詩作の先蹤となる梁川星巌の詩集岐山注『星巌詩註』を出版している。なお『五千巻堂集』の原稿・初稿本がアジア・アフリカ図書館に保管されており、簡斎の作業をたどることができる。

35　岐山の蔵書を引き受けた：『（住友本）小倉正恒』に以下のようにある。

岐山は五千巻堂主人の号を持つほど万巻の書籍を蔵していたが、大正五年に六十歳で病没すると、書物に目のない正恒は、一つには遺族のためにその蔵書のほとんどを引き取り、簡齋文庫は更に大部の書目を加えた。これが後に、多く愛知大学へ移されて簡齋文庫として保存せられていることは、また、後に記す。（同書169ページ）

36　阿倍野の松風荘：『蘇浙游記』（昭和四年一二月）奥付には著作兼発行人住所として、「大阪市住吉区相生通一丁目二四　松風荘」と記されている。なお刊行自体は「於支那上海発行」とある。

37　東洋文庫:1917年に三菱財閥の第３代総帥岩崎久弥が、中華民国総統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソンの所蔵する中国に関する欧文文献（モリソン文庫）を購入したことに始まり、以後も継続的に資料を収集。1924年に財団法人東洋文庫を設立した。

簡斎は昭和９年１月29日評議員就任、昭和10年１月24日理事転任、昭和11年11月19日重任（『東洋文庫十五年史』（1939年（昭和14年）東

洋文庫）による）

38　大阪商科大学：現在の大阪公立大学の前身校の一つ。沿革は以下の通り。
1880年（明治13年）、大阪商業講習所発足。
1889年（明治22年）、大阪市立大阪商業学校。
1901年（明治34年）、大阪市立大阪高等商業学校。
1928年（昭和３年）、大阪商科大学。簡斎はこの時期に理事を務めた。
1949年（昭和24年）、大阪市立大学。
2022年、大阪公立大学。
一貫して大阪市民の支援に基づく市民の大学という特色を持ち続けてきた。

39　帝室博物館：明治後期から1947年まで存在した博物館で宮内省の所管。現在の東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館の前身。1917年から1922年にかけては森鴎外が総長を務めた。同館は1923年（大正12年）の関東大地震で大きな被害をこうむった。1928年（昭和３年）に昭和天皇の即位礼を期に復興本館の建設が決まり、大礼記念帝室博物館復興翼賛会（会長：徳川家達）が設立された。関係法律は以下の通り。
大礼記念帝室博物館復興翼賛会事業費ノ補助ニ関スル法律（昭和４年４月２日法律第42号
https://hourei.ndl.go.jp/simple/detail?lawId=0000021705&current=-1
https://www.digital.archives.go.jp/file/3134157.html

40　大阪府立図書館：現在の大阪府立中之島図書館の前身。住友家、住友グループの支援を幾度も受けている。
1899年（明治32年）「大阪府教育施設計画書」発表。
1900年（明治33年）臨時府会市部会で大阪図書館の建設予算案が提出。同年、住友家第15代当主・住友吉左衛門友純から、大阪府に対し図書館の建物寄付の申出。
1903年（明治36年）、商議員に、住友吉左衛門、幸田成友らを委嘱。
1904年（明治37年）、大阪図書館開館。
1906年（明治39年）、大阪府立図書館と改称。
1918年（大正７年）、住友家からの寄付による本館増築決定。
1923年（大正12年）、住友家より、洋書寄贈。後の「住友文庫」。
1974年（昭和49年）、大阪府立中之島図書館に名称変更。
1981年（昭和56年）、川田順（住友幹部社員）旧蔵資料が寄贈される。

41　東亜同文会：1898年（明治31年）から1946年（昭和21年）に存在した民間外交団体。東亜同文書院の経営母体で、霞山会の前身。創立時の会長は近衛篤麿、会員として谷干城、岸田吟香、宮崎滔天、内藤湖南、山田良政、林毅陸、根津一らが名を連ねる。
1943年に東亜同文会の理事を務めたことが、蔵書の愛知大学への移譲につながったと推測される。

42　懐徳堂に寄付『（住友本）小倉正恒』441ページ

43　山根徳太郎：1889年－1973年。難波宮の大極殿跡を発掘した。1928年（昭和３年）大阪商科大学予科教授、1949年（昭和24年）新制大阪市立大学法文学部教授。山根は考古学者であり、文献資料の整理に特段の業績を持つことは知られない。

44　難波宮：日本古代の宮趾。国の史跡「難波宮跡 附 法円坂遺跡」に指定されている。上記、山根徳太郎の研究によって全貌が明らかとなった。

45　上海住友洋行：1916年、漢口（武漢）・天津とともに開設された（『住友の歴史』下210ページ）

46　福田千代作：1885年（明治18年）－没年不明。広島県出身。1907年、上海東亜同文書院商務科を卒業。上海に在住し、昭和15年上海居留民団長、住友合資会社上海支店長。（『人事興信録』第13版（昭和16年）下）
https://dl.ndl.go.jp/pid/1070514/1/533）
また『東亜同文書院大学史』（1982年 滬友会）「各界における同窓の活動―実業界―商社関係―住友」の部分で「住友における同窓最古参者は福田千代作（第４期生）で、高田商会より住友総本社に移り、初期の対中諸案件に参画し、のち上海販売店支配人を経て、内地勤務となったが、在滬十数年の経験と知識を買われ、昭和十四年上海居留民団助役に就任、のち民団長となり、戦時中の上海邦人のために多大の努力を傾けた。」と記されている。なお同書には「二十五期より書院に住友派遣生を送る制度が実施され銀行・本社交代で選抜し毎年一名ずつ派遣することとなった。」と記されており、25期から30期の入学が確認できる。30期入学の1930年は、簡斎が総理事に就任した年である。

47　東亜興業社長梅村清：その事績については次項掲載書に詳しい。なお愛知大学とのつながりでいえば、1948年段階で「理事　梅村清　東亜興業社長」の名が見える。

48 『実録 昭和太閤記－梅村清波乱の生涯』斎藤健治（文）、梅村昭允（編集・発行）308ページ

49 文学部教授内藤戊申：内藤湖南の息で、愛知大学文学部教授として東洋史を講じ、多くの論文をあらわした。「中国近代史の分期論--学説展望」などを「愛知大学国際問題研究所紀要」に載せている。なお『愛知大学五十年史』には社会学科教員予定者として、

職名：教授
専任兼任の別：専任
担当学科目：東洋史
最終卒業学校：京大文学部東洋史学科
採用予定年月：昭和25年10月
月額基本給：9500円
氏名：内藤戊申

が記録されており、1950年の教員構成には、

教授　内藤戊申　京大文卒　前東洋文化研究所員　中国社会史

とあり、本文中には1955年の「愛知大学文学部史学科増設認可申請書」で「申請書には多くの教授陣が並んでいた。専任は、鈴木泰山・歌川学・鈴木中正・内藤戊申の四氏だったが、そのうち鈴木（泰）・内藤戊申の両氏は実際には、客員教員だった。」と記されている。また1958年度の内藤戊申教授担当科目として「社会史」「東洋史特殊講義」「東洋史演習講読㈱」が記載されている。

50 副手：「文学部では、学部や文学会の諸事務を円滑ならしめ、またより高次の勉学を指向する学生に機会を与える観点から、副手や助手を置いていた。学部を卒業して間もないものは副手に、修士以上の資格を有する者は助手に発令した。」と『愛知大学五十年史』に記されている。

51 今泉潤太郎：1932年－。愛知県豊橋市出身。愛知大学名誉教授。

1955年 － 愛知大学文学部文学科卒業。愛知大学華日辞典編纂所勤務。
2000年 － 愛知大学現代中国学部長。
2003年 － 愛知大学名誉教授。
『中日大辞典』第三版（大修館書店、2010年）編集主幹。

52 藤井宣丸：愛知県豊橋市大村町黒下の浄円寺前住職。大谷大学卒業後、浄円寺で修行に励むかたわら、創設されたばかりの愛知大学で副手を務めた。「〈調査報告〉水野梅暁・藤井草宣関係史料の調査と保存」（広中一成・長谷川怜　愛知大学「国研紀要」146（2015.11）：131－149」
また藤井宣丸氏は2016年11月12日に愛知大学豊橋キャンパスで開かれたワークショップ「近代日中仏教交流史からみる東亜同文書院・愛知大学：書院で学んだ藤井静宣（草宣）と、愛知大学に関わった藤井宣丸」において、「誕生直後の愛知大学：副手として見た創立期」と題する話をしている。（愛知大学リポジトリ（石田卓生「水野梅暁ならびに藤田静宣（草宣）と東亜同文書院」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター報』Vol. 25、2017年３月）参照。）
また宣丸本人よりもその父「藤井静宣」を対象とするものであるが、『方鏡山浄円寺所蔵　藤井静宣写真集―近代日中仏教提携の実像』（2017年　社会評論社）に「息子・藤井宣丸が見た、父・藤井静宣」というインタビュー記事が掲載されている。

53 新村徹：1936年（昭和11年）－1984年（昭和59年）。愛知大学中国文学科卒業。1975年より桜美林大学助教授を務め、後に同教授。『愛知大学漢籍分類目録』は昭和34年の刊行であり、この時点で新村徹氏は学部在籍中であったか。

54 仕事ぶりを今でも明瞭にご記憶：2019年秋、ご本人より直接うかがった。

55 旧陸軍予備士官学校跡：陸軍で予備役に就く下級将校を養成するための学校。豊橋陸軍予備士官学校は1939年（昭和14年）８月１日施行の陸軍予備士官学校令改正（勅令第517号）により設置された。現愛知大学豊橋校舎は、豊橋陸軍予備士官学校、豊橋第一陸軍予備士官学校の跡地である。

56 無窮会：簡斎は理事長（1957年－1960年）をつとめた。1955年以降、小倉正恒らの活動で700万円が集まり、単独での財政安定化が果たされたことが無窮会ホームページに記されている。三宅真軒の蔵書も収められている。

57 江戸末期の漢学者の実力を存分に発揮したものとされる：『韓非子』（中公文庫本）町田三郎解説。

58 著者個人による木活字印刷出版：「簡斎文庫本『韓非子翼毳』と太田方」木島史雄（「文学論叢」第158輯2021年愛知大学人文社会学研究所）

59 漢文大系本：『韓非子翼毳』（服部宇之吉校訂　1911年（明治44年）冨山房）

60 木活字本は、雄松堂の影印複製本のほか、国会図書館デジタルアーカイブ、国立公文書館などが電子公開されている。

61 永山近彰：金沢の出身で『加賀藩史稿』（出版人前田直行、1899年）を編纂している。彼も金沢の人脈に連なる人物である。

62 金沢の人脈：小倉正恒の活動を「準拠集団」

という側面から分析した以下の論文がある。
・「財閥経営者の準拠集団行動史―小倉正恒を中心として」（瀬岡誠　参考文献参照）
・「財閥経営者とキリスト教社会事業家Ⅰ―小倉正恒と留岡幸助の連帯性の形成過程を中心として」（瀬岡誠　参考文献参照）
また以下の講演記録には、東亜同文書院と石川県とのつながりが記されている。「講演記録：東亜同文書院と郷土（石川県、金沢市）の人々」（脇水達生（同文書院記念報31）

63　安井息軒：息軒の蔵書や関連資料は、慶應義塾大学斯道文庫に安井文庫として収蔵され、解題や書籍リストが「斯道文庫論集」に掲載されている。またその生涯は、『安井息軒』（黒江一郎 1953年 日向文庫刊行会）、『安井息軒先生』（若山甲藏 1913年 蔵六書房）に詳しい。

64　『周礼』：中国戦国時代末期に理想官職制度を記した書物。

65　谷干城：1837年（天保８年）－1911年（明治44年）。土佐出身の武士、陸軍軍人、政治家。安井息軒に学んだ。1877年（明治10年）の西南戦争の際には、熊本鎮台司令長官として西郷軍の攻撃から熊本城を守り、政府軍の勝利に貢献した。

66　陸奥宗光：1844年（天保15年）－1897年（明治30年）。紀伊国和歌山出身。安井息軒に学んだ。明治期に版籍奉還、廃藩置県、徴兵令、地租改正に深くかかわり、第２次伊藤内閣では外務大臣として領事裁判権の撤廃に成功した。

67　福岡藩：筑前国福岡に政庁を持つ外様大名。黒田氏。1784年（天明４年）には藩校修猷館、甘棠館が創立された。

68　亀井昭陽：1773年（安永２年）－836年（天保７年）。福岡藩２藩校のうち甘棠館祭主であった亀井南冥の子。学統は単純ではないが菱園派に連なる。

69　亀陽文庫：亀井南冥・亀井昭陽の著作を収蔵・検証するための施設で、1974年（昭和49年）に福岡県甘木市に設立されたが、現在は福岡市西区能古に移転している。（「亀井南冥・昭陽全集」刊行時は甘木市所在）

70　「亀井南冥・昭陽全集」：全８巻のうち、第５巻に収められる。（亀井南冥・昭陽全集刊行会編1979年 福岡・葦書房刊）

71　庄内藩：出羽国鶴岡に政庁を持つ譜代大名。酒井氏。藩校は致道館で、その遺構が国指定史跡庄内藩校「致道館」として公開されている。

72　白井重行：1753年（宝暦３年）－1812年（文化９年）。羽前の人。庄内藩儒。加賀山猛夏門（『漢文学者総覧』（長澤規矩也監修1979年汲古書院）などによる）。祖父・白井久兵衛（茂種）は荻生徂徠の門人であった。江戸に出て太宰春台、松崎観海に徂徠学を学び、寛政異学の禁の風潮が強い中で1805年（文化２年）鶴岡に藩校致道館を創立、自ら祭酒兼司業となった。藩政にも深くかかわり財政健全化を果たしている。

73　戸崎淡園：1724年（享保９年）－1806年（文化３年）。名は哲、允明。字は、子明、哲夫、希哲。号は、淡淵、淡園、降水館、浄巌。常陸の人。常陸守山藩儒。平野金華門。（『漢文学者総覧』（長澤規矩也監修1979年汲古書院）などによる）

74　『論語徴』：荻生徂徠による『論語』注釈・解釈書。

75　源頼寛：1703年（元禄16年）－1763年（宝暦13年）。江戸中期の大名、陸奥国守山藩（水戸藩支藩、現在の福島県郡山市）第２代藩主。氏は松平、名は頼寛、号は黄龍、観濤閣、常陸の人。1738年（元文3年）襲位。若い頃、荻生徂徠に師事し、藩主となった後も藩校養老館を創建して学業の奨励にも努めた。

76　寛政異学の禁：寛政２年（1790年）、江戸幕府老中・松平定信が寛政の改革の一環で行った学問統制。直接的には幕府直轄の学問所の学問を朱子学にすることであったが、諸藩もこれに倣い、古文辞学、陽明学などの非朱子学は多く藩校から排斥された。

77　小倉文庫については、以下の２つのリストが公開されている。
・「小倉文庫目録」（「朝鮮文化研究」第９号2002年東京大学大学院人文社会系研究科・文学部朝鮮文化研究室刊）
・「小倉文庫目録　其二　旧登録本」（「朝鮮文化研究」第10号2007年東京大学大学院人文社会系研究科・文学部朝鮮文化研究室刊）」

78　「大阪府立図書館韓本目録」（大阪府立図書館編集　1968年大阪府立図書館発行）

79　『小倉正恒談叢』：参考文献参照。

80　鈴木馬左也：1904年第三代住友本店総理事。内務官僚出身。（『住友の歴史』下205ページ）『小倉正恒談叢』中「住友の伝統精神と先輩の遺業」に「鈴木馬左也、中田錦吉、湯川寛吉、三総理事の遺業」の項目が建てられ、簡斎から見た鈴木馬左也の姿が描かれている。

81　朝鮮を視察：各種年譜、川田順「随行紀程」による。

82　「愛知大学図書館簡齊文庫を訪れて」大木康（愛知大学図書館「韋編」49号）による。

83　『李義山詩集』：国内各図書館に『重訂李義山詩集箋注三巻、集外詩箋注一巻、坿詩話一巻、

坿重訂李義山年譜一卷』（清・朱鶴齡 原本、乾隆９年江都汪氏刊、乾隆11年重校本）などが所蔵されている。

84　李商隱：812年（元和７年）－858年（大中12年）。晩唐の官僚政治家、漢詩人。字は義山、号は玉谿生。
『小倉正恒談叢』中の「漢詩一夕話」に「李義山の人となり」の項目が建てられている。

85　朱鶴齡：1606年－1683年。字長孺、號愚庵、江蘇呉江人、明末清初の學者。明末に諸生となったが、明滅亡後は郷里に隠居し著述に専心した。顧炎武、錢謙益、萬斯同、徐乾學等と交友した。

86　紀昀：1724年（雍正２年）－1805年（嘉慶10年）。字は暁嵐。『四庫全書』の総纂官。李商隱の詩集に対して「点論」「同評」「詩説」を著している。
・『李義山詩集』三卷 唐・李商隱撰 清・紀昀點論（鏡烟堂十種／紀曉嵐全集）
・『李義山詩集』三卷・坿詩譜一卷 唐・李商隱撰 清・紀昀同評、清・朱鶴齡箋注。同治九年、廣州倅署刊本。
・『玉溪生詩説』二卷 清・紀昀撰 覆原寫本、光緒十三年刊本（槐廬叢書三編（叢書菁華／紀曉嵐全集））

87　『小倉正恒談叢』中の「漢詩一夕話」：同書239ページ。

88　陶淵明：『小倉正恒談叢』中の「漢詩一夕話」に「陶淵明の高風」の項目が建てられている。

89　白楽天：『小倉正恒談叢』中の「漢詩一夕話」に「白楽天閑居生活」の項目が建てられている。

90　蘇東坡：『小倉正恒談叢』中の「漢詩一夕話」に「蘇東坡の心境」の項目が建てられている。

91　同行の川田順「随行紀程」による。